

長岡京市文化財調査報告書

第 47 冊

2 0 0 5

長岡京市教育委員会

編 集 財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡市文化財調査報告書

第 47 冊

2 0 0 5

長岡市教育委員会

編 集 財団法人長岡市埋蔵文化財センター

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

巻頭図版一



(1) 墓輪列の検出作業風景（北西から）



(2) 墓輪列の精査風景（北から）



(3) 前方部の埴輪列（南西から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査



(1) 1トレンチ造出しと前方部の埴輪列（南西から）



(2) 前方部の葺石検出状況（南西から）



(3) 前方部葺石の基底石（西から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

卷頭図版三



2 トレンチ前方部南西隅の葺石と墳丘整地土（南西から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

卷頭図版四



(1) 2トレンチ墳丘整地土の断ち割り（北東から）



(2) 1トレンチ造出しの断ち割り（南西から） (3) 1トレンチ墳丘整地土の断ち割り(南西から)



序 文

昭和29年暮れに始まった長岡京跡の発掘調査は、昨年記念すべき50年目を迎え、いろんな事業が行われました。元旦から京都新聞が長岡京を特集し、長岡京の発掘を振り返りながらその意義についてふれました。3日には『宮都のロマン』と題した連載を始め、研究にかかわった人たちの体験や思い出、長岡京の様子を41回にわたりまとめました。また、8月21日には長岡京の調査研究にかかわった有志たちで「長岡京発掘50年を語るつどい」を開きました。

本市では、11月23日に市民や歴史ファンなど300人余り参加のもとで、「長岡京発掘50年記念フォーラム」を開催しました。記念講演で京都大学名誉教授の上田正昭氏は「長岡京はまぎれもなく本格的な都であった」「市民の宝を持ち腐れにするのではなく、遺跡を保存し活用する知恵を出し合うのが発掘50年の意味」と訴えられました。また、『広報ながおかきょう』(12月1日号)に特別企画として長岡京の意義・歴史、中山修一記念館について9ページにわって掲載しました。

こうした取り組みを通じて、「幻（まぼろし）の都」といわれた長岡京は、50年の歳月を経て、「実在した都」「現（うつつ）の都」として知られるようになってきています。この長岡京が地域の宝、地域を結ぶ掛け橋として、新たな息吹が吹き込まれることを願っています。

さて、ここに刊行します報告書は、国・府補助事業として平成16年度に実施した発掘調査成果をまとめたものです。なかでも、乙訓地域最大の前方後円墳である恵解山古墳（久貝二丁目）の発掘調査では、前方部南西端で葺石、墳丘西側のくびれ部付近で造出し、前方部で埴輪列がそれぞれ確認され、前方部の規模・構造を知る上で大きな成果を得ることができました。

最後になりましたが、調査にあたり種々のご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなど関係機関、また、発掘調査にご協力をいただきました土地所有者や近隣の皆様方に紙面をお借りして深く感謝いたします。

平成17年3月

長岡京市教育委員会

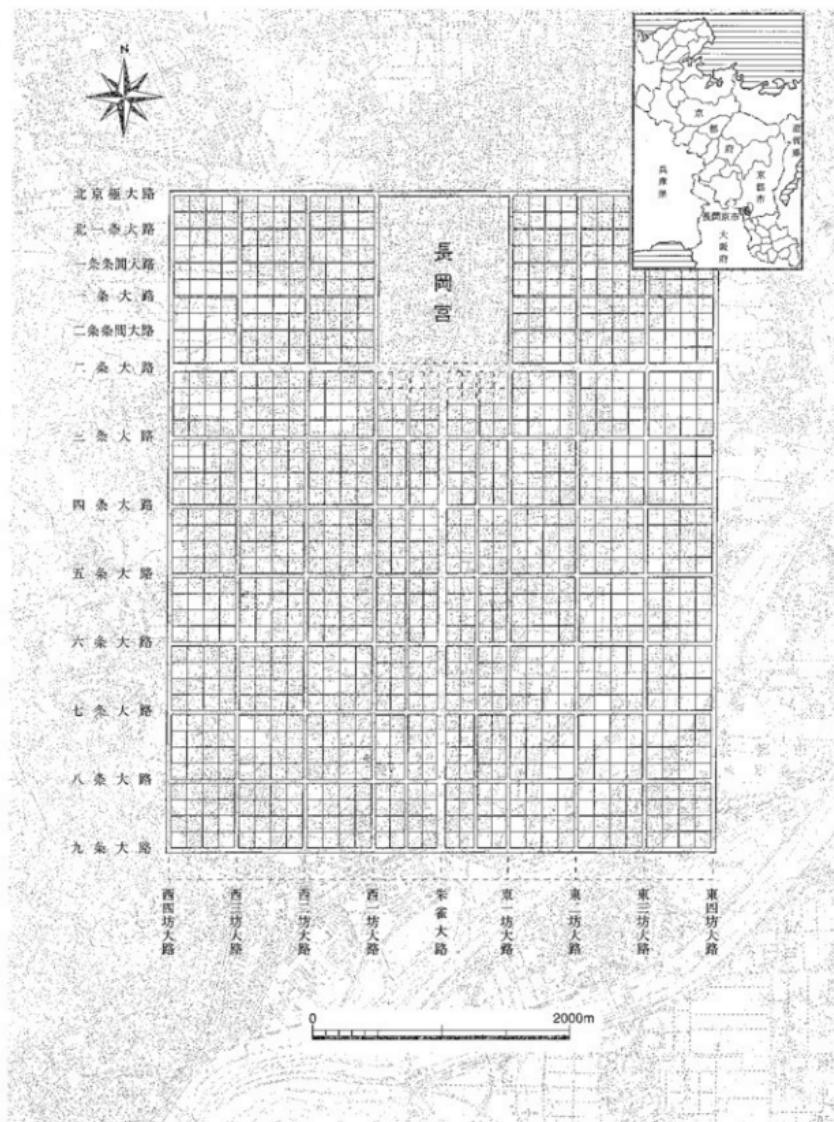
教育長 芦 田 富 男

凡　　例

1. 本書は、長岡京市教育委員会が平成16年度に国庫補助事業として実施した発掘調査の概要報告である。調査対象地は付表-1、その位置は第1図に示した。
2. 長岡京跡の調査次数は、宮城、右京城、左京城にそれぞれ分けて調査件数を通算したものである。調査地区名は、基本的に前半は奈良文化財研究所による遺跡分類表示、後半は京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977年)収録の旧大字小字名をもとにした地区割りに従った。
3. 長岡京の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号の復原に従った。
4. 本文の(注)に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集(1985年)に従って略記した。
5. 長岡京跡に関する調査の場合、正式な遺構番号は調査次数+番号であるが、本書では煩雑を避けるため調査次数を省略している。
6. 本書挿図の土層の色名は、基本的に『新版標準土色帳』(1997年版)を参考にした。
7. 本書で用いた方位と国土座標値は、旧座標の第VI系にもとづいたものである。
8. 現地調査および本書作成に至るまでの整理・製図作業には、多くの方々のご協力を得た。
9. 本書の執筆は、第1章を小田桐淳、第2章を原秀樹がそれぞれ担当し、全体の編集を山本輝雄が行った。

付表-1 本書報告調査一覧表

調査次数	地区名	所 在 地	現地調査期間	調査面積	備 考
長岡京跡右京 第816次	7ANKNC-6	長岡京市天神二丁目20-5	2004年5月10日 ↓ 2004年5月14日	40m ²	西陣町遺跡
恵解山古墳 第5次 長岡京跡右京 第827次	7ANQKK-4	長岡京市勝竜寺1203-1他、 久貝二丁目815-3他	2004年9月1日 ↓ 2004年10月28日	218m ²	南栗ヶ塚遺跡



第1図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)

本文目次

第1章 長岡京跡右京第816次（7ANKNC-6地区）調査概要

1	はじめに	1
2	調査概要	1
3	まとめ	4

第2章 恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次（7ANQKK-5地区）調査概要

1	はじめに	5
2	調査経過	6
3	検出遺構	8
4	出土遺物	19
5	まとめ	20

図 版 目 次

- 卷頭図版 1 (1) 埋輪列の検出作業風景（北西から）
 (2) 埋輪列の精査風景（北から）
 (3) 前方部の埋輪列（南西から）
- 卷頭図版 2 (1) 1トレンチ造出しと前方部の埋輪列（南西から）
 (2) 前方部の葺石検出状況（南西から）
 (3) 前方部葺石の基底石（西から）
- 卷頭図版 3 2トレンチ前方部南西隅の葺石と墳丘整地土（南西から）
- 卷頭図版 4 (1) 2トレンチ墳丘整地土の断ち割り（北東から）
 (2) 1トレンチ造出しの断ち割り（南西から）
 (3) 1トレンチ墳丘整地土の断ち割り（南西から）

長岡京跡右京第816次調査

- 図版 1 (1) 調査地全景（北から）
 (2) トレンチ全景（東から）
- 図版 2 (1) 西端部の土層（北から）
 (2) 西半中央部の土層（南から）
 (3) 東半中央部の土層（南から）
 (4) 東半中央部の土層（北から）
 (5) 東端部の土層（東から）

恵解山古墳第5次調査・長岡京跡右京第827次調査

- 図版 3 (1) 調査前の前方部と周塚（北西から）
 (2) 調査前の前方部（北から）
 (3) 調査前の前方部南西隅（西から）
- 図版 4 (1) 1号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
 (2) 2号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
 (3) 3号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
 (4) 4号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
- 図版 5 (1) 5号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
 (2) 6号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
 (3) 7号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
 (4) 8号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
- 図版 6 (1) 9号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
 (2) 10号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
 (3) 11号埴輪細部（左から東面—上面—西面）

- (4) 12号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
- 図版7 (1) 13号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
(2) 14号埴輪細部（左から東面—上面—西面）
(3) 墓輪列の布掘り（南東から）
(4) 墓輪列の布掘り（北西から）
(5) 墓輪の取り上げ作業風景（北西から）
- 図版8 (1) 1トレンチ前方部の北壁（南東から）
(2) 1トレンチ前方部の東壁（南西から）
- 図版9 (1) 1トレンチ周塙内の転落石出土状況（南西から）
(2) 1トレンチ周塙内の転落石出土状況（南から）
- 図版10 (1) 2トレンチ前方部南西隅の葺石検出状況（北東から）
(2) 2トレンチ前方部南西隅の葺石検出状況（南東から）
- 図版11 (1) 前方部南面の葺石（除去前、南東から）
(2) 前方部南面の葺石（除去後、南東から）
(3) 前方部南西隅の葺石全景（南から）
- 図版12 (1) 前方部西面の葺石（北西から）
(2) 前方部西面の葺石（除去後、南西から）
(3) 2トレンチ前方部の葺石全景（西から）
- 図版13 (1) 前方部南西隅の葺石（南西から）
(2) 前方部南西隅の葺石細部（南西から）

挿 図 目 次

第1図 長岡京と調査地位の置図 (1/40000)	iii
 長岡京跡右京第816次調査	
第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第3図 調査地平・断面図 (1/200・1/100)	2
第4図 調査地周辺の地形復元図 (1/5000)	3
 恵解山古墳第5次調査・長岡京跡右京第827次調査	
第5図 発掘調査地位置図 (1/5000)	5
第6図 1トレンチ作業風景 (東から)	6
第7図 2トレンチ作業風景 (南西から)	6
第8図 恵解山古墳の調査区配置図 (1/1000)	7
第9図 1トレンチ周壕部南壁土層図 (1/100)	8
第10図 1トレンチ検出遺構図 (1/100)	9・10
第11図 1トレンチ埴輪列と布堀り溝実測図 (1/20)	11・12
第12図 1トレンチ造出しの基底石 (東から)	13
第13図 1トレンチ周壕部の断面図 (1/20)	13
第14図 1トレンチ墳丘部の葺石実測図 (1/20・1/40)	14
第15図 2トレンチ検出遺構図 (1/20・1/50・1/100)	15・16
第16図 2トレンチ葺石実測図 (1/40)	17・18
第17図 1トレンチの埋戻し作業 (東から)	20
第18図 2トレンチの埋戻し作業 (東から)	20

付 表 目 次

付表-1 本書報告調査一覧表	ii
付表-2 1トレンチ周壕部の遺物	19
付表-3 報告書抄録	21

第1章 長岡京跡右京第816次(7ANKNC-6地区)調査概要 —長岡京跡右京六条三坊十五町、西陣町遺跡—

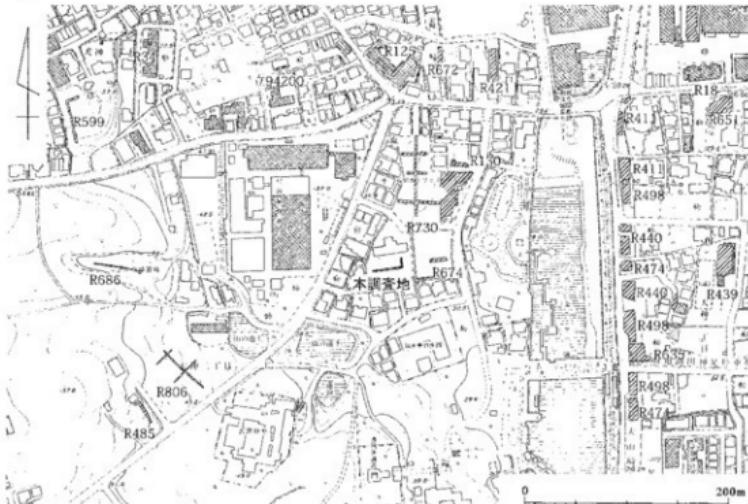
1 はじめに

- 1 本調査は、2004年5月10日から5月19日まで、長岡京市天神二丁目20-5において実施した長岡京跡右京第816次調査に関する概要報告である。
 - 2 本調査は、天神二丁目における個人住宅建築工事に先立って実施した埋蔵文化財試掘調査で、調査面積は40m²である。
 - 3 発掘調査は、平成16年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は同センター調査係長小田桐淳が担当した。
 - 4 本報告の執筆・編集は小田桐が行った。

2 調査概要

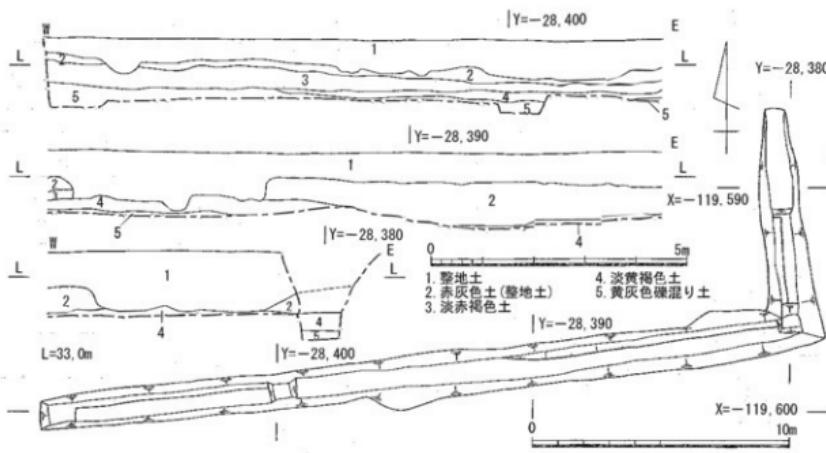
調査地は長岡天満宮の東を限る八条ヶ池の西、天満宮境内の北にあたり、最近まで銀行の寮が建っていたところである。

調査地周辺の地形は、西山から派生する高位段丘の裾に形成された、段丘をおおう扇状地上に立地している。



第2図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査概要



第3図 調査地平・断面図 (1/200・1/100)

周辺は長岡京跡右京六条三坊十五町にあたるとともに西陣町遺跡の範囲内にもあたっており、右京第130次調査⁽¹⁾で平安時代の墳墓跡や鎌倉時代の茶器跡が検出されている他、右京第730次調査⁽²⁾では鎌倉時代の大規模な溝や古墳時代、飛鳥～奈良時代の遺構・遺物も検出されている。

調査トレンチは、テニスコートが設けられていた部分に幅1mで長さ40mの「L」字状に設定した。トレンチの中心座標はX=-119,595、Y=-28,390、地表面高は33.6mを測る。以下、第3図断面図にそって調査の概要を記す。

調査地の層序は、敷地造成に伴う整地土が0.4～0.8mの厚さで盛られて水平面を形成している。この整地土の下面には搅乱穴が掘り込まれており、コンクリート塊などが多数埋められていた。寮以前の建物解体時のものであろう。深さは場所によってトレンチ底より深い部分もある。

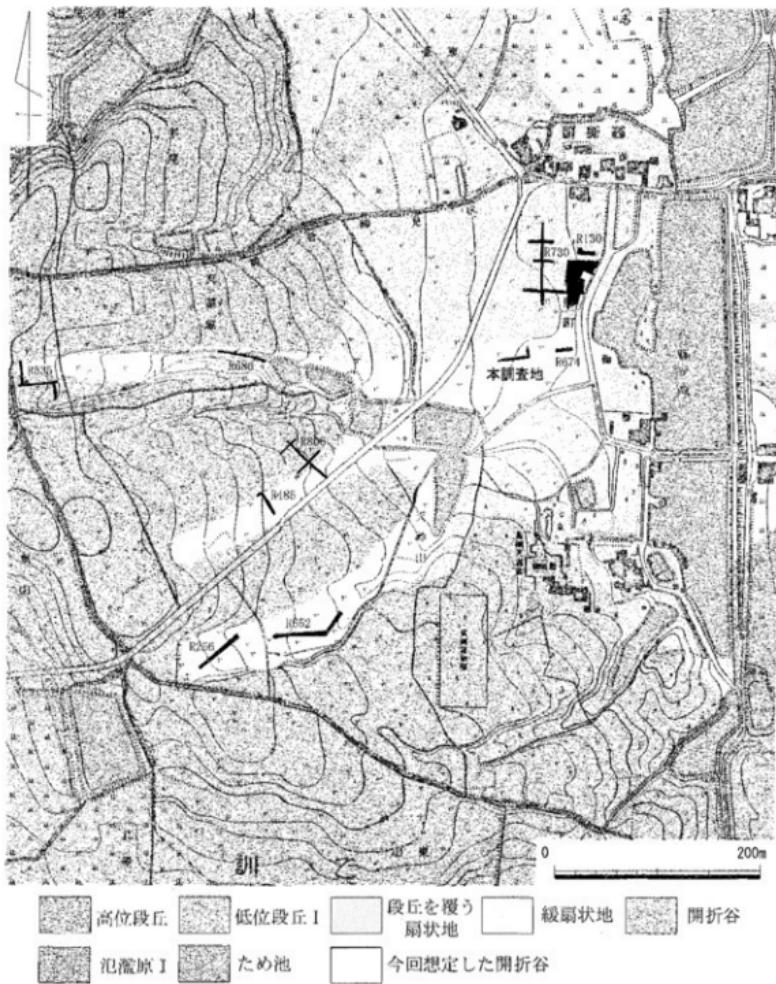
整地土層の下に堆積する赤灰色土層は地山の二次堆積層で、淡赤褐色土層とともに寮以前の造成土と考えられる。ここまでいる層はよく縮っている。

これらの層の下は非常に縮まりのない堆積で、自然堆積層と思われる。

淡黄褐色土層はトレンチ西半部から始まり、東方へ下降する緩斜面を形成する。座標Y=-28,400以西からは、直径2cmほどの土師器小片が多く出土した。土師器は磨耗が激しいが、薄手の破片で外面にハケ目が認められることなど、古墳時代頃と思われるものばかりである。

淡黄褐色土の上面および下面からの遺構は検出されなかった。黄灰色砾混り土から遺物は出土していない。

以上のように、調査はGL-1.4m～2.0mにわたって実施したが、地山面については確認されなかったものの、遺物包含層と深い堆積層を確認することができた。調査トレンチ最深部の標高はトレンチ西端で31.9m、東端では31.6mである。



第4図 調査地周辺の地形復原図 (1/5000)

3まとめ

今回の調査は当初の予想以上に深く、また試掘調査でトレンチ幅1mという制約もあったため、地山面までの追求はできなかった。ここでは周辺の調査を基に当地の性格を考察しておく。

道路を挟んだ調査地北隣りの右京第730次調査では、西から東へ傾斜する地山面が確認されている。遺構が検出された東半部の南端での高さは32.5m、西半部の最高所で36.2m、南端では34.8m

4 まとめ

の高さで地山が検出されている。今回のトレンチより北へ約50mの地点である。また東27mの右京第674次調査では、西端で30.8mの高さで地山が検出された。これらの成果から北から南へも地形が下がっていることが判明してきた。

第4図は、昭和11年当時の地形図をベースに調査地点と地形分類図を重ねた図であるが、センターを見ると谷の切り込みが数条認められる。さらに谷筋の出口付近には、土手を築いて造られたため池が複数あるのも見て取れる。現在では開発や竹藪の改変によって様変わりしているが、この古い地図で読み取れる三条の谷地形は右京第535次調査⁽³⁾、右京第686次調査⁽⁶⁾、右京第485次調査⁽⁷⁾、右京第806次調査⁽⁸⁾、右京第256次調査⁽⁹⁾、右京第652次調査⁽¹⁰⁾で確認されている。そしてこれら三条の谷筋が一つに合流して八条ヶ池へと流れ込んでいる姿が浮かび上がってくる。

今回の調査地は、まさに谷が押し流してきた土砂が堆積し、谷口部を埋めていく所での調査であったことが推測される。

この谷が長岡天満宮境内の北を画する地形であり、西陣町遺跡の範囲にも影響を及ぼしているといえよう。

注1) 木村泰彦・中井正幸「長岡京跡右京第130次調査概要」「長岡京市センター報告書」第2集 1985年

2) 原 秀樹「右京第730次調査概報」「長岡京市センター年報」平成13年度 2003年

3) 京都市都市計画図(1/3000)「長岡」 (大正11年測図 昭和10年修正測図 昭和11年製版)

4) 「長岡京市域地形分類図」「長岡京市史」資料編一 1991年

5) 小田樹 淳「右京第535次調査概報」「長岡京市センター年報」平成8年度 1998年

6) 小畠佳子「右京第686次調査概報」「長岡京市センター年報」平成12年度 2002年

7) 木村泰彦「右京第485次調査概報」「長岡京市センター年報」平成6年度 1996年

8) 小田樹 淳「右京第806次調査概報」「長岡京市センター年報」平成16年度 2005年

9) 原 秀樹「右京第256次調査概報」「長岡京市センター年報」昭和61年度 1988年

10) 原 秀樹「右京第652次調査概報」「長岡京市センター年報」平成11年度 2001年

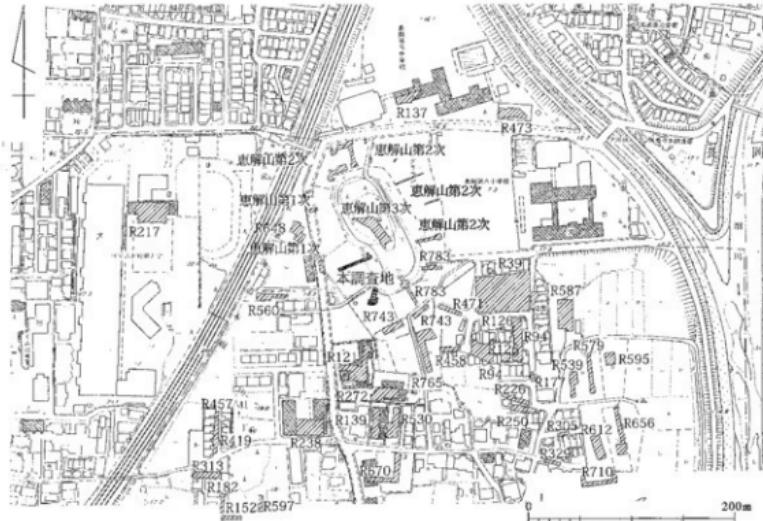
第2章 恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次 (7 A N Q K K - 5 地区) 調査概要

－恵解山古墳、長岡京跡右京八条二坊三町、南栗ヶ塚遺跡－

1 はじめに

- 1 本報告は、2004年9月1日から10月28日まで、京都府長岡京市勝竜寺1203-1他、久貝二丁目815-3他において実施した恵解山古墳第5次調査および長岡京跡右京第827次調査に関する概要報告である。
- 2 調査は、国史跡に指定されている恵解山古墳の墳形とその規模を明らかにすることを主眼におき、合わせて長岡京跡右京八条二坊三町および南栗ヶ塚遺跡に関する資料を得ることを目的とした。調査面積は218m²である。
- 3 発掘調査は、平成16年度の国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた(財)長岡京市埋蔵文化財センターが実施した。現地での調査は、同センター調査係主査原秀樹が担当した。

調査では、中尾芳治(元帝塚山学院大学)、都出比呂志(大阪大学)、和田晴吾(立命館大学)、菱田哲郎(京都府立大学)、橋本清一(山城郷土資料館)、丸川義広(京都市埋蔵文化財研究所)、梅本康広(向日市埋蔵文化財センター)、廣瀬覚(立命館大学大学院生)の各氏より



第5図 発掘調査地位置図 (1/5000)

6 調査経過

種々の御教示を得た。特に、橋本氏には、葺石の石材について分析していただいた。

5 本報告の執筆ならびに編集は原が行なった。今回は、先年度の報告と同様に遺構の概要を記すにとどめ、調査の最終年度に出土遺物と総括を行なう予定である。

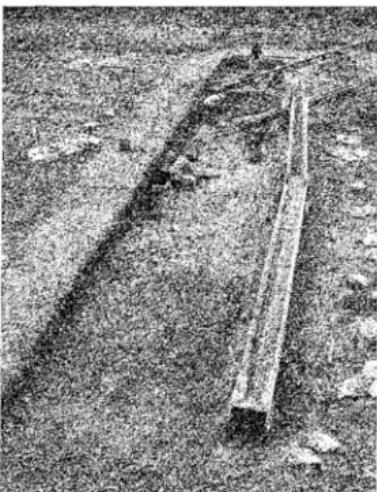
2 調査経過

恵解山古墳は、小畠川と犬川によって形成された氾濫原に接する段丘縁辺部につくられた古墳時代中期の前方後円墳である。墳丘規模は、桂川右岸流域では最大級であり、全長約120m、後円部径約60m、高さ約8m、南面する前方部幅約55m、高さ約6.5mで、周囲に幅約30mの盾形周壕が復元されている。古墳の現況は、後円部が墓地、前方部が竹藪と栗林になっており、周壕の北側と東側は、調査後に埋め戻されてグランドとなっている。

当古墳は、1925（大正14）年に梅原末治による踏査が行なわれている。その後、1968（昭和43）年に京都府教育委員会によって墳丘の測量調査が行なわれて以降、長岡京市教育委員会による発掘調査が4回実施されている。この間、1980（昭和55）年の第3次調査では、前方部から鉄製武器を約700点近く埋納した施設が確認され、全国的に注目される。そして、翌年に国史跡の指定を受け、市では史跡地内の用地買収を年々進め、20年余りを経た2002（平成14）年に公有化が完了する。これを機に、昨年度より史跡整備に向けた基礎資料を得るための発掘調査を行なっており、今回の第5次調査は2年度目となる。以下、各調査の概要を列記する。

第1次調査 西側の周壕外堤部分を調査したが、外堤とみられる遺構は確認されなかった。
1975（昭和50）年調査。

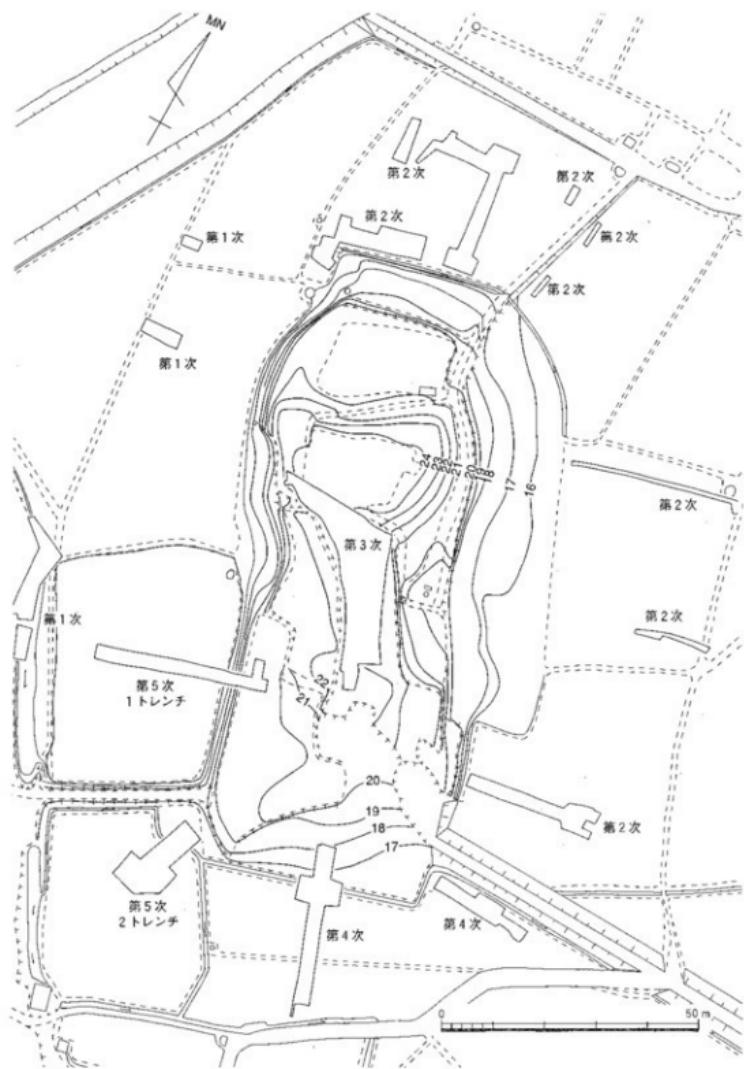
第2次調査 後円部と前方部で葺石の一部が確認され、現存する墳丘が大きく原形を損ない、



第6図 1トレンチ作業風景（東から）



第7図 2トレンチ作業風景（南西から）



第8図 恵解山古墳の調査区配置図（1/1000）

瘦せていることが判明する。周壕と外堤の一部も確認する。1976（昭和51）年から1977（昭和52）年の調査。

第3次調査 墳丘上段傾斜面の葺石と前方部のほぼ中央から、副葬品のみを埋納した施設を確認する。葺石は、遺存状態が比較的良好で、墳丘西側のクビレ部の状況が明確になる。また、副葬品埋納施設からは、刀、剣、鎌、蕨手刀子など武器類を主体とする鉄製品が700点近くもみつかり、全国的に注目される。この他、後円部の竪穴式石室に使用されたであろう安山岩や結晶片岩、副葬品の一部と見られる管玉が出土した。1980（昭和55）年調査。

第4次調査 前方部の中央と南東部から葺石を確認する。これにより、前方部の幅は従来より大きくなることが明らかとなる。竹藪の開墾で墳丘は削平されていたが、旧表土と墳丘盛土が確認された。また、周壕は浅く、水をたたえた状況は認められなかった。2003（平成15）年調査。

第5次調査 前方部から周壕を横断する高低差約3mの第1トレーニングと、前方部の南西隅に第2トレーニングを設定し、2004（平成16）年9月1日から重機で表土の除去を始めた。

調査では、第1トレーニングの前方部テラス面から埴輪列を、周壕から造出しと前方部の基底石を確認し、第2トレーニングでは前方部の南西隅を確認した。いづれも恵解山古墳では初めて確認されたものであり、古墳の規模と構造を明らかにする上で貴重な資料を得ることができた。これらの成果は、10月2日に現地説明会を開催して一般に公開した。その後、写真測量による図化と写真撮影、埴輪の取り上げと埴輪出土位置を明示する処置をした後、10月28日に埋め戻しを終えて現地作業を終了した。

3 検出遺構

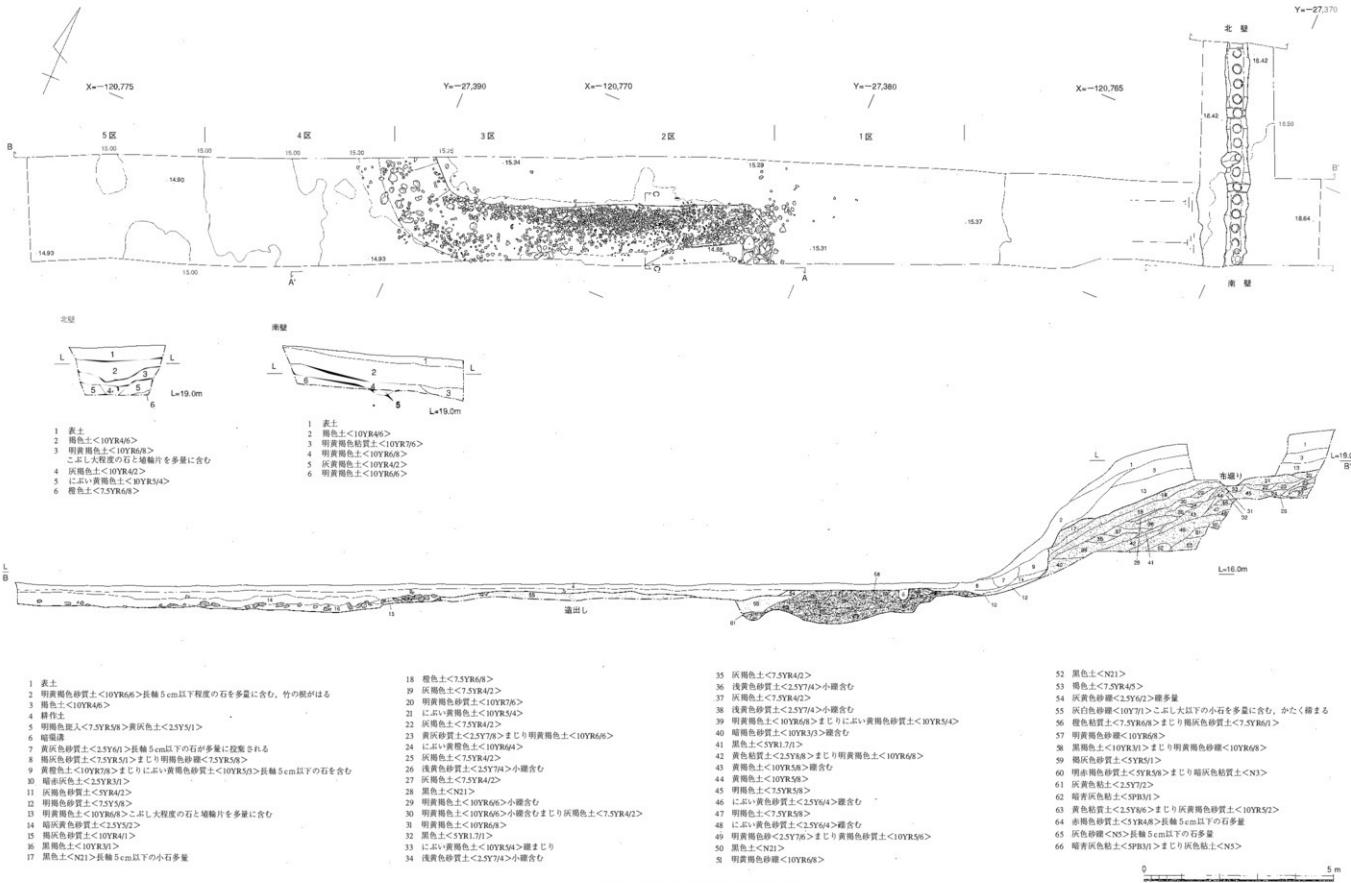
（1）第1トレーニングの所見

調査前は、前方部西側が栗林で、周壕は水田跡であった。調査区の層位は、主に耕作土、表土、搅乱層などの現代盛土層（第10図1～13）、墳丘と周壕内に転落、埋没した再堆積層（第10図14～16）、墳丘を構築する墳丘盛土層（第10図17～53）、古墳造成前に整地を行なった墳丘整地土層と造出し（第10図54～66）に大別される。現代盛土層は、墳丘部分の表土が0.6m～1m、斜面部分は0.4m前後で竹の根株と小さな石が多量に混じる。断ち割りによると、墳丘は現状の墳丘裾より約2m内側まで削平されており、斜面と同様に多量の石が投棄されている。

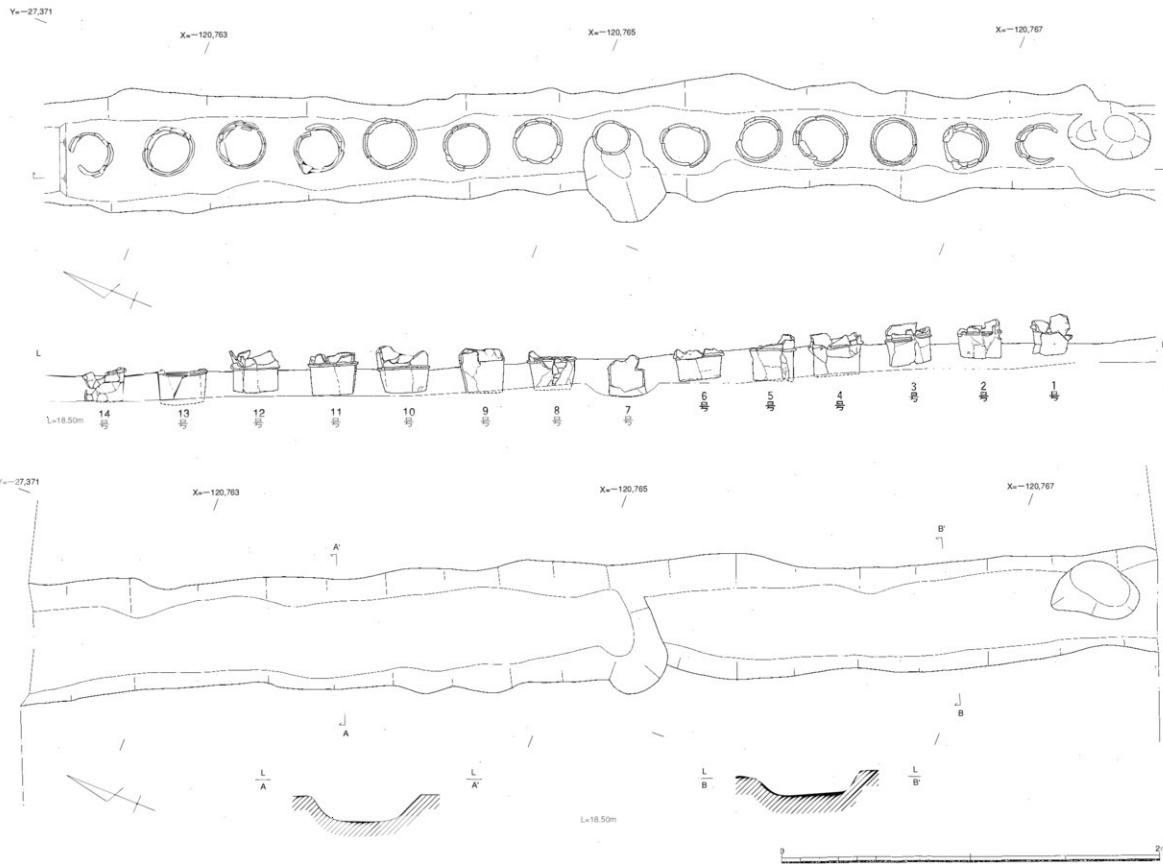
埴輪列 幅約0.5mの布掘り溝に樹立する1号～14号の埴輪を確認した（巻頭図版1）。このう



第9図 1トレーニング周壕部南壁土層図（1/100）



第10図 1 トレンチ検出遺構図 (1/100)



第11図 1 トレンチ埴輪列と布掘り溝実測図 (1/20)

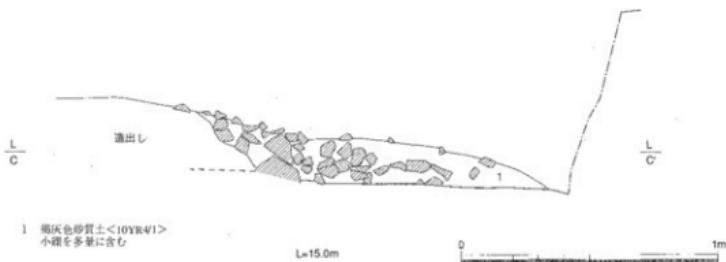
ち、7号は土坑の搅乱で破損しており、1号の南側も土坑で搅乱されている。埴輪の遺存状態は、1段目のタガと透かし孔を残す程度であるが、7号については直径が小さいことから盾形の可能性が指摘される。布掘りの底面は、北側で深く南側はやや浅くなっている、樹立する埴輪も7号以北と6号以南では底面のレベルに高低が見られる(第11図)。なお、埴輪列を覆う明黄褐色土層には、小さな埴輪片とこぶし程度の石は混在するが、いわゆる葺石に相当するような人頭大程度の石は出土しておらず、調査区の壁断面にも見当たらない(図版8)。埴輪列を検出した前方部テラス面と、第3次調査の鉄器埋納施設の比高は約3mで、前方部の基底石付近と埴輪列の比高も約3mであるが、テラス面の幅についてはすでに埴丘斜面が削平されており、今回の調査では埴輪列の周辺から基底石を確認することができなかった。恵解山古墳で原位置を保つ樹立した埴輪列の出土は初めてである。

埴丘の盛土 部分的な断ち割り調査であるが、基本的に灰褐色土層と浅黄色砂質土層を交互に積み重ねており、その間に斜面全体を化粧するように18層や49層が覆うとみられる。埴輪列が樹立するテラス面はほぼ水平堆積であるが、埴丘上段へ向かう部分では盛土が斜めに積み重なる状況が認められた(第10図)。なお、埴丘テラス面から中近世と想定される埋葬施設を確認した。掘形は直径0.6m前後、深さ0.6mの円形で、上面にはかなり大きな石が置かれており、下から頭骨を含む人骨を確認した。15号埴輪の掘形内にも骨片が入っていたことから、周辺は埋葬施設であった可能性が高い。

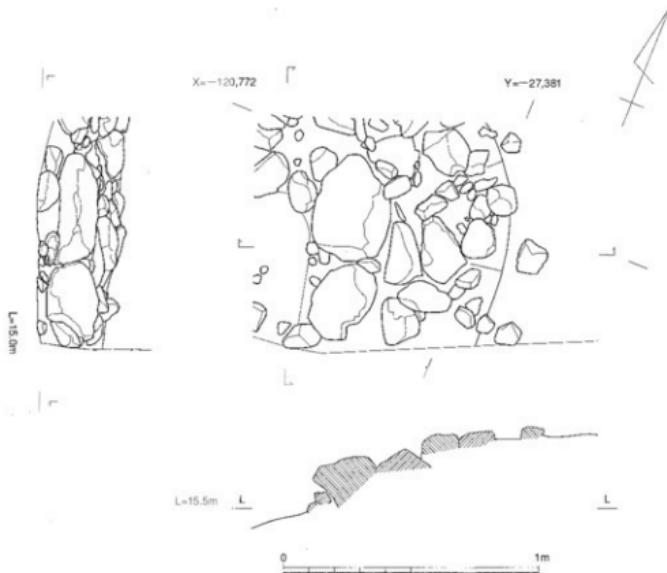
埴丘整地層と造出し 周塙部分では、削平された埴丘下の地山面から古墳造営時の地業跡である埴丘整地層と、埴丘裾の基底石を確認するとともに、周塙に張り出す造出しを初めて確認



第12図 1トレンチ造出しの基底石（東から）



第13図 1トレンチ周塙部の断面図 (1/20)



第14図 1トレンチ墳丘部の葺石実測図(1/20)

した。墳丘整地層は、断ち割りによると深さ0.3m～0.9mで、底面には高低がある。埋土は、主に茶褐色系と黄褐色系の粘質土が堆積しており、同様の整地土層は第2トレンチと共通する。前方部の基底石は、現在の墳丘裾から西へ約5mのところで確認され、改めて墳丘がかなり削平されていたことがわかった。墳丘整地層の前面に据えられた基底石は、長さ40cm前後の石を横長に2個連ねている。順に積み上げられた葺石は緩やかに傾斜しており、残存する上位の葺石の形状からみて平坦面をもつ低い壇になると見られる。

造出しあは、墳丘整地層の前面に灰白色を呈する堅緻な砂礫層によって盛土されている(図版4(2))。断ち割りで確認するまでは、地山とみまちがうほどであった。上部は削平されているが、規模は前方部の基底石から西に約10m延びて北へ折れる。裾付近には前方部の基底石より小振りの石を基底石に据えているが、最終段階の断ち割りで造出し南辺に埋没する基底石を確認した(第12図)。造出し南辺は、西辺に比べてこぶし程度の小さな石が多量に埋没している。造出しの全容解明については、本調査の未掘部分を含めて今後の調査に負うこととなった。

周塙の堆積層 周塙内には、造出し斜面に多量の転落石が堆積する崩落土と、おおむね3層からなる周塙堆積層がある。造出しの周辺に集中する人頭大の転落石は、周塙埋土の最上層にあたる(図版9)。深さは30cm前後と浅く、底部は平坦となっている。周塙内の転落石と遺物は、1区から5区のうち造出し南辺の2区と3区に集中する。

(2) 第2トレンチの所見

調査前は水田で、現況の弧状に曲がる水路と段差は後の耕作に伴う盛土であった。本来の前方



第15図 2トレンチ検出遺構図 (1/20・1/50・1/100)



第16図 2トレンチ葺石実測図(1/40)

部南西隅コーナーは、これより南西地点から確認した。緩やかに南へ傾斜する地山面と墳丘整地土層、直角を呈する前方部南西隅の葺石が明らかとなった（巻頭図版3）。

墳丘整地層 墳丘の造営に先行する地業跡で、断ち割りによると1トレンチと同様に墳丘周囲の地山を掘り下げて主に茶褐色系と黄褐色系の粘質土を埋めている（巻頭図版4（1））。ただし、前方部の西側については整地層の前面に灰白色粘土を盛り土しており、その上に葺石と細かな石が敷き詰められている。西端の方形土坑は、中世の擾乱である。深さ約20cm。

前方部南西隅の葺石と溝 南面する葺石は、長さ8m分検出した。昨年度の第4次調査で検出した前方部の基底石と直線的に繋がっている。コーナー部分から東へ延びる基底石は、大きな石を横長に据えた規則的な配置が確認できるが、途中から石は小振りとなり方向も不揃いになる。墳丘西面の葺石は、幅約80cm、深さ約20cmの溝底東端に基底石を据えており、南面より底面が約30cm低くなる。コーナー部分から北へ延びる基底石は、大きな石を横長に据えた規則的な配置は途中までで、これより北側は南面より小さなこぶし大ほどの石を灰白色粘土に貼り付けるように施している。溝と葺石は北端でやや西へ曲がりはじめており、1トレンチの前方部基底石に向かって直線的に延びる状況ではない。前方部の西側については、整地層の前面に盛られた灰白色粘土に細かな石を貼り付けており、南面と施工方法が異なる。これらの状況は、墳丘西側に附随する施設が存在する可能性を示すものとみられる。石材は、従来と同じくチャート、砂岩、頁岩～粘板岩が多用されている。

3 出土遺物

今回の調査では、主に墳丘テラス面から14本の樹立した埴輪と、周壕の再堆積層から弥生時代、古墳時代、長岡京期から平安時代前期、鎌倉時代後期、室町時代後期の土器や陶器、瓦などが出土した。埴輪列の各個体は上部を欠損するが、盾形や朝顔形、蓋形とみられる形象埴輪が含まれている。周壕からは、家形埴輪片が出土した。円筒埴輪の調整は、表面の摩滅したものもあるが、外面はタテハケ、ナナメハケ、ヨコハケがあり、内面はヨコハケが残るものがある。透かし孔は円形。焼成は土師質で、黒斑を有する。

付表2は、1トレンチの周壕を1区～5区に分けて遺物を取り上げた概略である。埴輪は、造出し前面の2区と3区に集中するが、その他の土器類は2区から5区まで一定量が出土している。2トレンチは、転落石を除去した範囲内であるが遺物はほとんど出土していない。

付表-2 1トレンチ周壕部の遺物

器種	1区	2区	3区	4区	5区	地区割前	合計
埴輪	53	412	210	47	2	113	837
土師器	0	10	22	17	27	16	92
須恵器	0	3	18	11	22	19	73
瓦器	0	1	4	1	0	8	14
縄緯陶器	0	0	0	0	1	0	1
国産陶磁器	0	1	2	0	0	0	3
輸入陶磁器	0	0	0	0	0	2	2
瓦	0	6	4	2	9	2	23
その他	0	3	0	2	1	1	7
合計	53	436	260	80	62	161	1052



第17図 1トレンチの埋め戻し作業（東から）



第18図 2トレンチの埋め戻し作業（東から）

5 まとめ

今回の調査では、恵解山古墳の規模と構造を解明する上で貴重な成果を得た。来年度も調査が予定されることから、ここでは主な成果を列記し、未解明なところは今後の調査に委ねたい。

第1は、前方部の埴輪列を初めて確認したことである。テラス面の基底石は未確認であり、埴輪列を覆う再堆積層に転落石が皆無である点は疑問として残る。断ち割りで確認した埋葬施設の存在と合わせて検討する必要があろう。

第2は、造出しを確認したことである。造出しは、整地層前面に白い砂礫で築かれており、集落が想定される段丘側に設定されている。2トレンチの墳丘が西へ張り出す部分も、整地層前面に灰白色粘土を用いる点で類似しており、同様の施設が存在するかもしれない。

第3は、前方部南西隅を確認したことである。葺石は、墳丘隅から一定の間だけ大きな石を長に据えており、角を堅固に視覚的にも強調したとみられる。墳丘裾の基底石は、第4次調査分を含めて標高14.8m前後があり、地盤を整地したうえで造営されたことを示している。墳丘南西隅が確定したことで、前方部幅は55mから73mまで延びることが明らかとなり、仮に鉄製品埋納施設を墳丘中軸線とすると、前方部幅は76m前後に復元される。なお、前方部南西隅に敷き詰められた細かな石は1段目の平坦面と想定され、葺石が上位に立ち上がる可能性は低いとみられる。

埋め戻しは、葺石に砂質土を掛けてブルーシートを敷き土砂を戻した。埴輪列は、記録作成後すべて取り上げ、図面に基づいて塙ビ管を並べて位置を明示した上で土砂を戻した。

注1) 山本輝雄他「恵解山古墳第3次調査概要」『長岡京市報告書』第8冊 1981年

2) 山本輝雄「恵解山古墳第4次調査概要」『長岡京市報告書』第46冊 2004年

付表-3 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第47冊
編著者名	小田桐淳、原秀樹、山本輝雄
編集機関	財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10-1

所取遺跡名	所在地	コード 市町村	通跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長岡京跡 西陣町遺跡	長岡京市天神 二丁目20-5	26209	107 70	34°55'17"	135°41'21"	20040510 20040514	40m ²	遺跡確認
長岡京跡 恵解山古墳 南栗ヶ塚遺跡	長岡京市勝竈寺 1203-1、久真 二丁目815-3	26209	107 200 103	35°59'56"	135°59'59"	20040901 20041028	218m ²	遺跡確認

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第816次） 西陣町遺跡	都城 古墓	長岡京期 平安～中世			
長岡京跡（右京第827次） 恵解山古墳（第5次） 南栗ヶ塚遺跡	都城 古墳 集落	長岡京期 古墳 中世	轟石、埴輪列、造出 し、周壁	土師器、須恵器、瓦 円筒埴輪、形象埴輪 土師器、瓦器、青磁	埴輪列および造出しの 存在を初めて確認した

緯度経度の測点は、調査区の中央部である。また、緯度経度の国土座標系は、旧座標系を使用している。

図 版



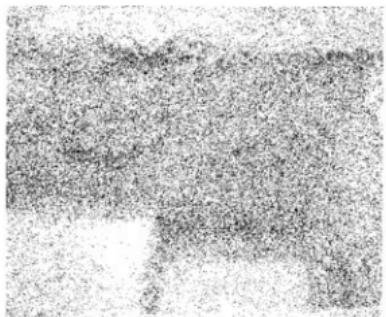
(1) 調査地全景（北から）



(2) トレンチ全景（東から）

長岡京跡右京第816次調査

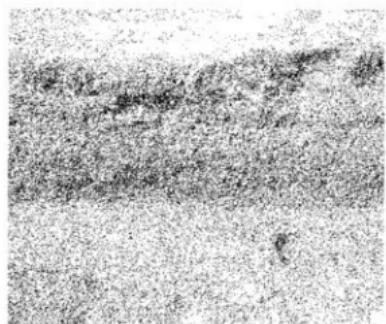
図版二



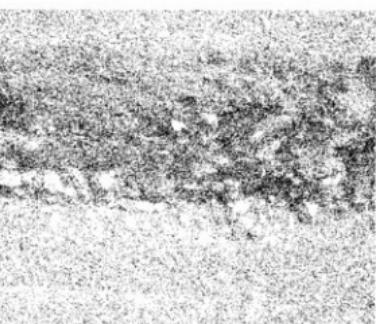
(1) 西端部の土層（北から）



(2) 西半中央部の土層（南から）



(3) 東半中央部の土層（南から）



(4) 東半中央部の土層（北から）



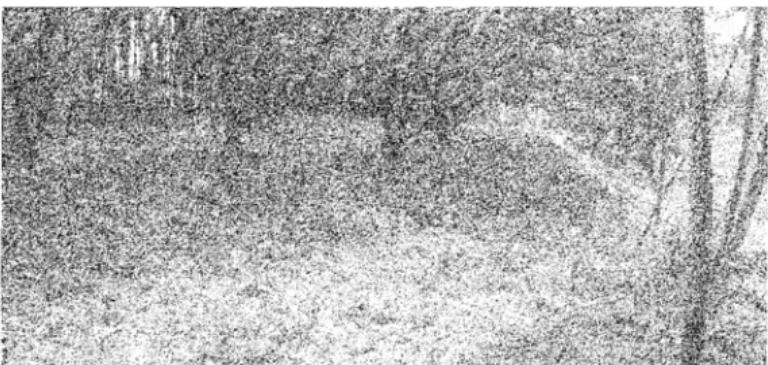
(5) 東端部の土層（東から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

図版三



(1) 調査前の前方部と周壕（北西から）



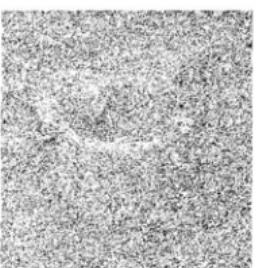
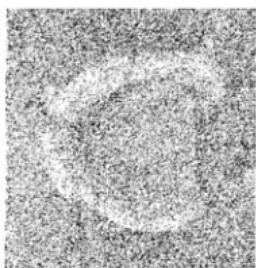
(2) 調査前の前方部（北から）



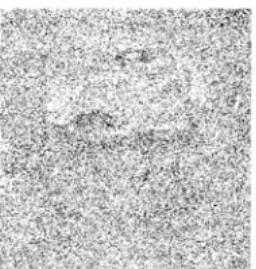
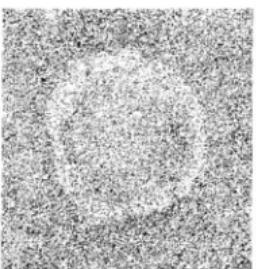
(3) 調査前の前方部南西隅（西から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

図版四



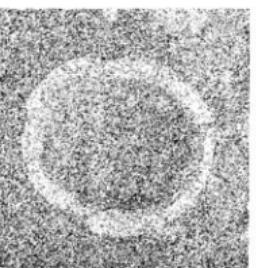
(1) 1号埴輪細部（左から東面—上面—西面）



(2) 2号埴輪細部（左から東面—上面—西面）



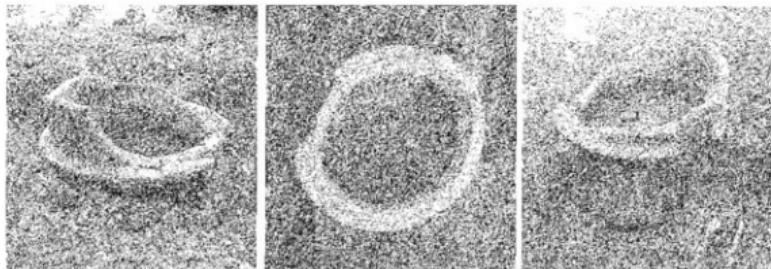
(3) 3号埴輪細部（左から東面—上面—西面）



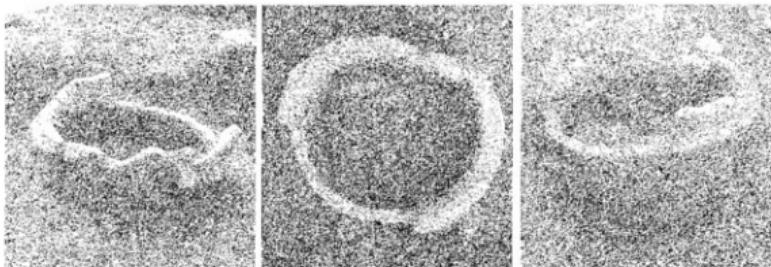
(4) 4号埴輪細部（左から東面—上面—西面）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

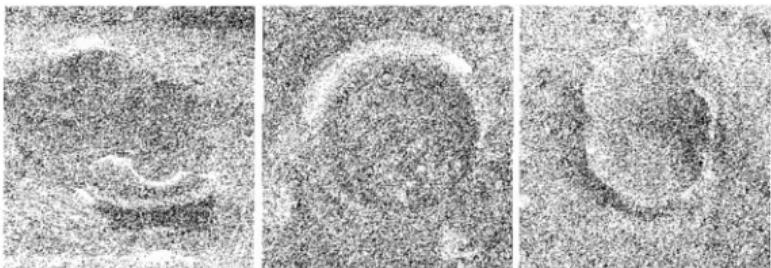
図版五



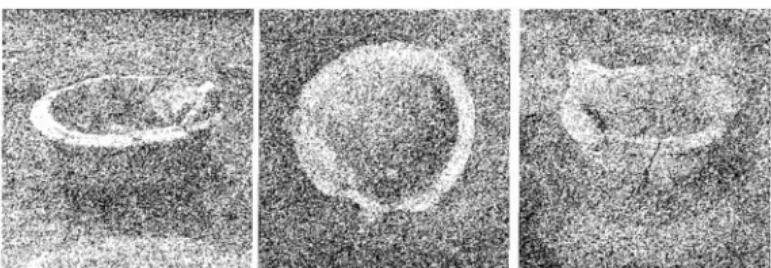
(1) 5号埴輪細部（左から東面一上面一西面）



(2) 6号埴輪細部（左から東面一上面一西面）



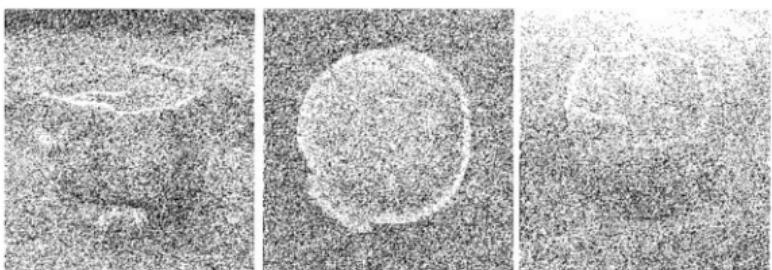
(3) 7号埴輪細部（左から東面一上面一西面）



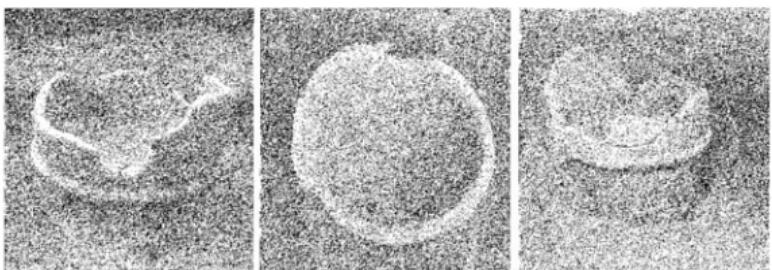
(4) 8号埴輪細部（左から東面一上面一西面）

惠解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

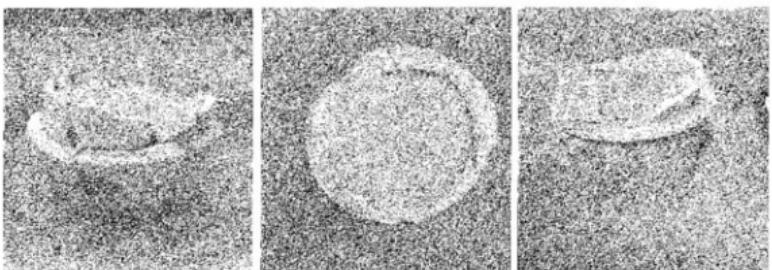
図版
六



(1) 9号埴輪細部（左から東面—上面—西面）



(2) 10号埴輪細部（左から東面—上面—西面）



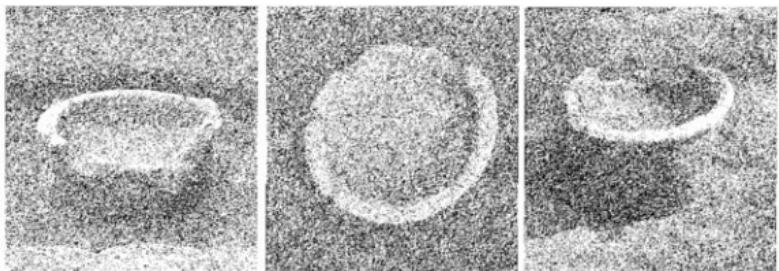
(3) 11号埴輪細部（左から東面—上面—西面）



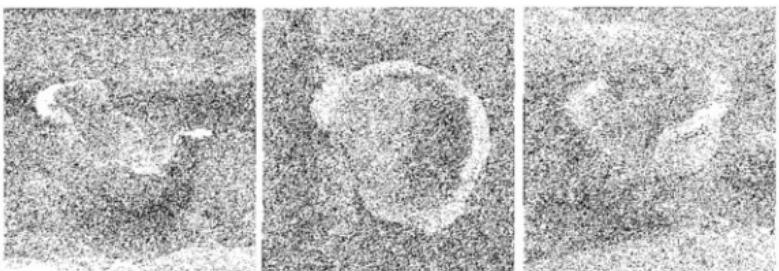
(4) 12号埴輪細部（左から東面—上面—西面）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

図版七



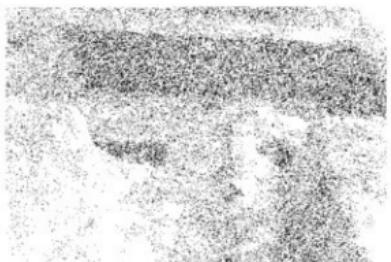
(1) 13号埴輪細部（左から東面—上面—西面）



(2) 14号埴輪細部（左から東面—上面—西面）



(3) 墓輪列の布掘り（南東から）



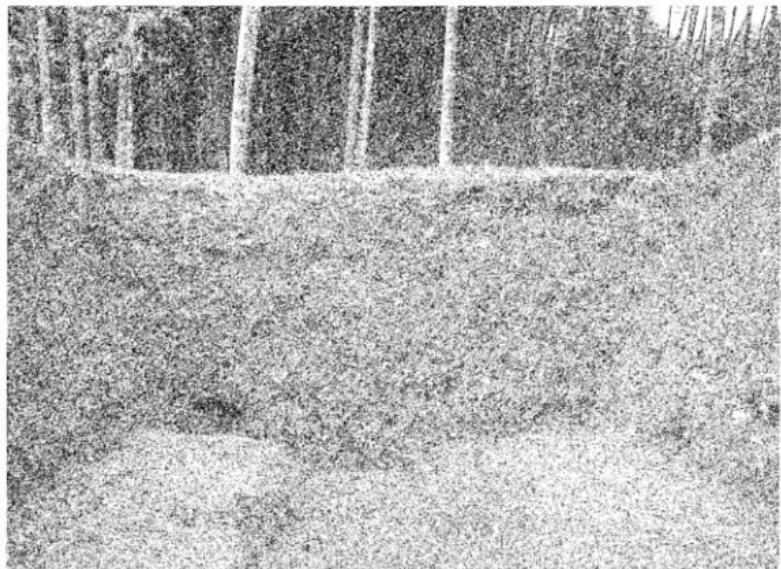
(4) 墓輪列の布掘り（北西から）



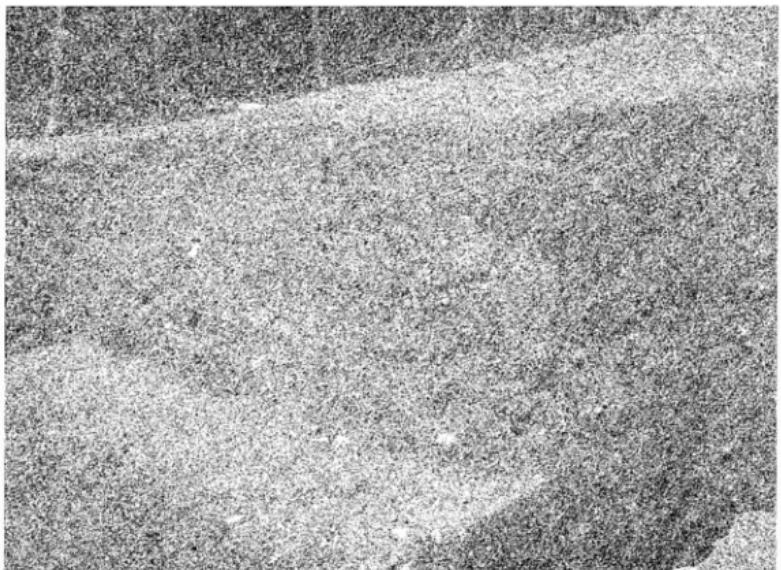
(5) 墓輪の取り上げ作業風景（北西から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

図版八



(1) 1トレンチ前方部の北壁（南東から）



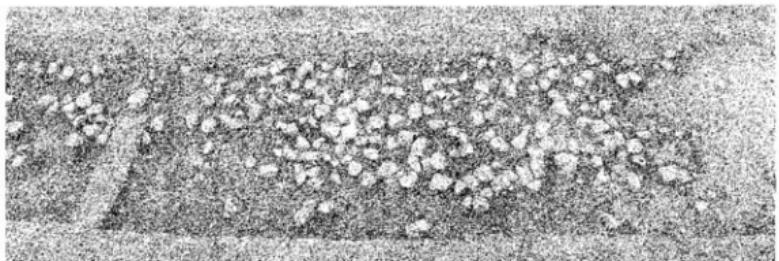
(2) 1トレンチ前方部の東壁（南西から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

図版九



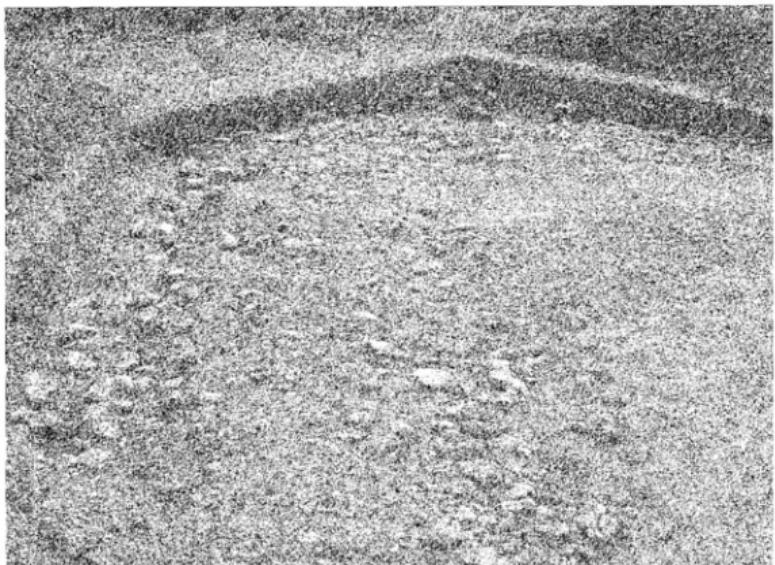
(1) 1トレンチ周塚内の転落石出土状況（南西から）



(2) 1トレンチ周塚内の転落石出土状況（南から）

惠解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

図版
①



(1) 2トレンチ前方部南西隅の葺石検出状況（北東から）



(2) 2トレンチ前方部南西隅の葺石検出状況（南東から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

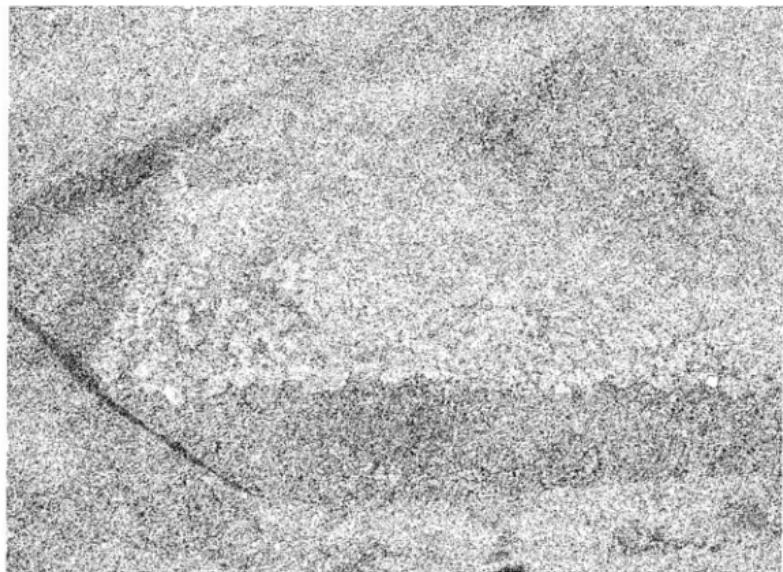
図版一



(1) 前方部南面の葺石（除去前、南東から）



(2) 前方部南面の葺石（除去後、南東から）



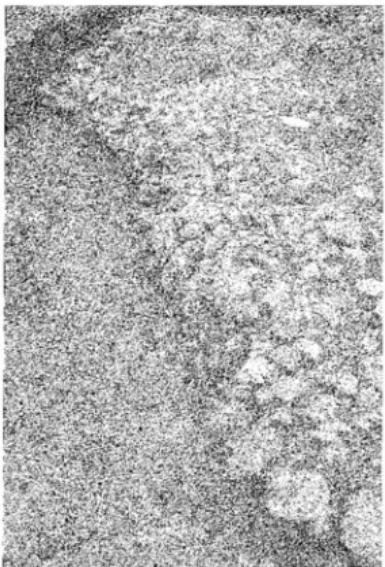
(3) 前方部南西隅の葺石全景（南から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

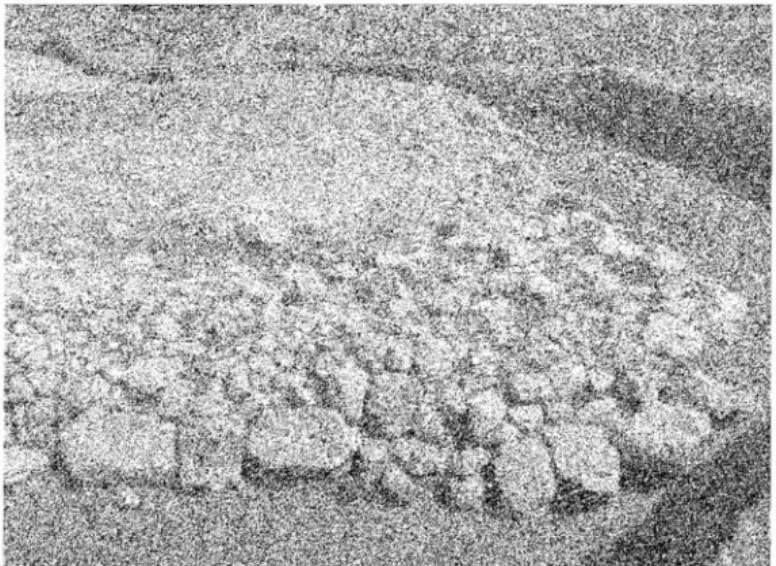
図版
一一



(1) 前方部西面の葺石（北西から）



(2) 前方部西面の葺石（除去後、南西から）



(3) 前方部の葺石全景（西から）

恵解山古墳第5次・長岡京跡右京第827次調査

図版一三



(1) 前方部南西隅の葺石（南西から）



(2) 前方部南西隅の葺石細部（南西から）

長岡京市文化財調査報告書 第47冊

平成17（2005）年3月28日 印刷

平成17（2005）年3月31日 発行

編 集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒617-0851 京都府長岡京市開田一丁目1-1

電話 075-951-2121（代）

印 刷 株式会社 アド・コム

〒600-8408 京都市下京区東洞院通五条上る深草町586番地1

電話 075-344-1118

FAX 075-344-1112